

## 内分泌代謝学領域の雑誌

越山裕行

### 1. はじめに

医学雑誌の意義を論ずる場合、読む雑誌としての意義と投稿する雑誌としての意義の2つが考えられるが、与えられたテーマは内分泌の臨床に役立つ雑誌ということであるから、これは当然前者の読む雑誌という意味と考える。なお内分泌腺の疾患を扱う「内分泌学」と糖尿病や高脂血症に代表される疾患を扱う「代謝学」とを分ける立場もないわけではないが、一括して「内分泌代謝学」として扱うのが一般的である。従って、ここでは主に読む雑誌としての意義を論ずる立場から、「臨床内分泌代謝学」に役立つ雑誌について述べる。

内分泌代謝学は比較的基礎と臨床が直結してきた分野である。従って臨床雑誌だけを読んでいたのでは、進歩についていくことは不可能であり、ここでも内分泌代謝の臨床雑誌にとどまらず、基礎雑誌も取り上げる。また基礎と臨床とならんで、内科の各分野で問題となるのは、専門化(分化)と統合である。内分泌代謝学も一般内科の進歩と無縁ではあり得ない。近年endocrineの定義が拡大され、従来の内分泌腺以外の臓器や細胞、血管壁なども内分泌器官としての特徴を持つことがわかり、内分泌代謝学は特にボーダーレスとなっている傾向が強く、neuro-immuno-endocrinology や cardiovascular endocrinology & metabolism などの学際領域の

学問が発達している。従って内分泌代謝学の専門誌のみでなく、一般内科誌にも目を通すことが必要である。しかしこの点では一般内科雑誌を挙げるときがないので、特に必要なものとどめる。

### 2. 国内雑誌

和文誌は投稿する雑誌としてはもちろん、読む雑誌としての意義も他の分野同様に少なくなりつつあるが、やはり母国語は簡単に読むには便利である。日本内分泌学会は会誌として和文誌の『日本内分泌学会雑誌』と、英文誌の『Endocrine Journal』の2つを持っている。

前者は歴史も古く、長らくわが国随一の内分泌関連の雑誌として権威あるものであったが、日本の内分泌学の発展と共に、他の分野と同様英文でないと評価されない事情もあり、近年投稿数も減少し沈滞傾向にあった。そこで評議員のアンケート調査をふまえ、投稿論文の掲載は終えることが決定した。そのため読む雑誌としての意義も抄録号以外は少なくなったと言わざるを得ない。

英文誌『Endocrine Journal』は、以前は『Endocrinologia Japonica』と称されていたが、国際化を図るため近年頭文字のEJを残して『Endocrine Journal』と改称された。まだ国内からの投稿が大部分を占めるのが現状で、その地位を上げるための方策が検討されている。

内分泌専門の商業誌としては『ホルモンと

こしやま ひろゆき：県立尼崎病院

内分泌代謝科主任医長

臨床』があり、特に日本内分泌学会の秋季大会などの一部の演題を選定して抄録集として毎年発行される『増刊号、興味ある症例』は、症例に遭遇したときの簡単なレファレンスとしては便利である。また日本臨床の増刊号の『内分泌症候群』や『広範囲血液・尿化学検査、免疫学的検査』なども後に述べるように有用なことがある。その他の一般内科雑誌、『日本内科学会雑誌』や『内科』『総合臨床』『日本臨床』『Molecular Medicine』(以前『代謝』という名前であった)などの商業誌でも内分泌の各分野(例えば甲状腺、骨カルシウム代謝、糖尿病など)の特集が組まれることがしばしばあり、参考になる。

### 3. 国外雑誌

内分泌代謝学の分野では米国がなお指導的立場を維持している。前述のように日本もイニシアチブを取ろうと努力しているが、現時点では米国の雑誌が最も重要であることに変わりはない。

米国内分泌学会は The Endocrine Society と称され、どこにも米国の文字がないことからわかるように最も古い内分泌学会であり、その年次集会は国際学会に相当するものである。The Endocrine Society は古くより、『Endocrinology』、『Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism』(JCEM) の 2 大雑誌を有しており、前者が基礎、後者が臨床の論文を掲載している。この 2 つは内分泌専門医のほとんどが目を通してしているものであろう。

JCEM は最近 Editorial、Clinical Review、Clinical case seminar、Prismatic case、Extensive personal experience などの新しい欄を数多く作り、一般投稿は以前載ることのなかった症例報告や preliminary なものも含め数多く短いものが掲載されるようになった。この変遷の評価は議論のあるところであろう。ただし、Editorial、Clinical Review

は後に述べるように欲しい文献を探すときの簡単な review として便利である。

更に The Endocrine Society は review のみの『Endocrine Reviews』、分子生物学を独立させた『Molecular Endocrinology』の 2 つの雑誌も発刊したが、ともに短い年数で高い評価を得ている。前者は内分泌関係の最も評価の高い review 専門誌であるが、通常は 1 つの review に参考文献が 400 近くあり、簡単に全体像を把握する文献としてはやや読みにくい感がある。後者は、最近では、後述の『Nature』『Science』『Journal of Biological Chemistry』(JBC) に匹敵するような論文が載るようになってきた。

英国内分泌学会も『Journal of Endocrinology』『Clinical Endocrinology』の 2 大雑誌を出しており、前者が基礎、後者が臨床専門であるが、現時点ではやはり米国の 2 大雑誌の方が評価が高い。

『Acta Endocrinologica』はヨーロッパの学会誌で、最近『European Journal of Endocrinology』と改称したが、文字通りヨーロッパの雑誌の性格が強い。

糖尿病関係では米国糖尿病学会(American Diabetes Association:ADA)の出している基礎の『Diabetes』、臨床の『Diabetic Care』が評価が高いが、他に『Metabolism』、『Diabetologia』がある。

更に内分泌のそれぞれの分野の専門雑誌としては骨・カルシウム代謝の『Journal of Bone & Mineral Research』、神経内分泌学の『Neuroendocrinology』『Journal of Neuroendocrinology』『Peptide』、甲状腺の『Thyroid』などがあるが、一般の内分泌科医が読まねばならない雑誌とは言えない。

その他には、イタリア内分泌学会誌『Journal of Endocrinological Investigation』や『Recent Progress in Hormone Research』、さらに最近発刊された『Endocrinologist』、『Endocrine』(Endocrine Journal に対抗して同じ名前 Endocrine

Journal を付けようとしたが、結局 Endocrine となったと思われる雑誌)などの雑誌もある。特に『Journal of Endocrinological Investigation』は症例報告も受理することから時々日本からの論文も掲載されているが、日本ではこれらの雑誌を定期的に読んでいる人は多くないであろう。

1. に述べたように、内分泌代謝学がボーダレスになりつつあることを反映し、内分泌代謝の臨床の進歩を理解するのに必要な雑誌は内分泌代謝の専門雑誌のみにはとどまらない。その意味で、英国の『Nature』、米国の『Science』、『Cell』の3つの基礎科学雑誌は、内分泌代謝学に限らず、医学全般において無視することはできない。特に前者2つは、内分泌代謝学のトピックスとなるような基礎研究の成果が載ることが多い。ただし、後からその結果がくつがえされることがあるのも、その特徴からやむを得ないことであろう。『Cell』はこれらに比べて自己完結が要求されるのでトピックスのものはむしろ掲載されにくい、1編読むと上質の小説を読んだような満足感を得られることがある。

また最近『Nature』の分子生物学部門を独立させた『Nature Genetics』は内分泌代謝学に限らず、様々な疾患の病因遺伝子の成果が掲載されており、今後一般化するの確実な遺伝子診断の知識を学ぶのに重要である。

更に『Journal of Biological Chemistry』(JBC)、『The Proceedings of the National Academy of Sciences, USA』(Proc Natl Acad Sci USA、いわゆるプロナス)、『Journal of Clinical Investigation』(JCI)も挙げられる。

また臨床一般誌の英国の『The Lancet』、米国の『The New England Journal of Medicine』なども臨床内分泌代謝学の画期的な成果が載ることも多く、毎週目を通すことが望ましいだろう。後者はマサチューセッツ州医師会の雑誌として発刊したものであるが、事務所はハーバード大学医学部構内の図書館Countway Libraryの中にある。私事

であるが、筆者が留学中、歴史を感じさせる外観を持ったこの図書館をよく利用した。学外文献も無料で取り寄せてもらえ、大変便利であった。日本語を学習中らしい係員に“Koshiyama-San”と呼び出されたのも楽しい思い出である。

さて、この『The Lancet』、『The New England Journal of Medicine』の2つの雑誌は臨床雑誌としては最高峰であり、重要な臨床研究が掲載される。特にある治療が本当に効果があるのかどうかの prospective studyの成果はこの2つに載ることが多い。糖尿病におけるインスリン強化療法の有用性の証明が『The New England Journal of Medicine』に掲載されたことは広く知られていることである。基礎雑誌に比べるとやや地味な感もあるが、近年の分子生物学の進歩を無視することはできず、最近では遺伝子異常の論文も散見されるようになってきた。『The New England Journal of Medicine』ではいわゆるhot paperにはEditorialと称して、論文の位置づけについてのEditorの意見がつけられることがあるが、これはその分野の簡単なreviewとして役に立つ。

#### 4. 雑誌の評価—impact factor

最近雑誌の数が増えるにつれ、各人の業績の評価をする際に、論文の発表された雑誌の客観的な評価法が求められるようになった。中でもimpact factor が代表的である。これは雑誌を読む際にも参考になり、この欄でもしばしば引用されている。すなわち評価の高い雑誌を優先的に読むということになる。

impact factor とは Science Citation Institute(SCI)が発表する指標で、過去2年間の全論文が他の論文に引用された平均回数を論文総数で割ったものである。すなわちその雑誌の一つの論文が他の論文に引用される回数を表し、これが高いほどその雑誌の評価が高いことになる。review 専門誌は impact

factorが高くなりやすい、読者の多い雑誌は必ずしも評価が高くないとも、impact factorが高くなりやすいなどの欠点もあるが、現在のところ雑誌の客観的評価としては一番用いられているものである。

例えば1993年の資料では、医学一般では『The New England Journal of Medicine』が23,762、『The Lancet』15,888、『Annals of Internal Medicine』9,297の順である。

内分泌学の分野では『Endocrine Reviews』が1位(12,953)、『Molecular Endocrinology』が2位(6,385)、以下10位まで挙げると、3位『Front Neuroendocrinology』(6,045)、4位『Recent Progress in Hormone Research』(5,909)、5位『Diabetes』(5,256)、6位『Journal of Bone and Mineral Research』(5,243)、7位『Journal of Cerebral Blood Flow and Metabolism』(5,241)、8位『Diabetologia』(5,047)、9位『Endocrinology』(4,256)、10位『Journal of Clinical Endocrinology and Metabolism』(4,220)の順であった。やはりreview誌の『Endocrine Reviews』が圧倒的に高い。私自身が見たこともない雑誌も入っているが、一つの目安にはなる。(表1)

## 5. 臨床内分泌代謝学の雑誌の読み方

若い医師より文献の集め方を聞かれることが多い。考えてみると、論文の書き方を論じた書物は数多くあるけれども、論文を書く際に重要な文献の集め方を論じた文章はあまり見たことがない。内分泌代謝学に限ると皆無に近いかも知れない。筆者自身を省みても、先輩や同僚のやり方やアドバイスを参考に試行錯誤を繰り返してきたように思う。そこで、筆者自身の内分泌代謝学の文献の読み方をここに述べることも意義があるかも知れない。

まず何か文献を探すきっかけになる理由としては、これまで遭遇したことの無い疾患に

あたり、その全体について知りたい場合、ある疾患での合併症や検査値異常を認めて関連があるかどうか、その頻度はどうか知りたい場合、ある疾患の治療方針の決定に迷う場合などに分けられるであろう。その際筆者は、とりあえずなるべく新しい文献、できればreviewでしかも評価の高い雑誌に掲載されているものをまず探す。それには国外雑誌なら『Endocrine Reviews』『JCEM』、国内雑誌では先に挙げた一般内科雑誌の特集号や『内分泌症候群』『ホルモンと臨床』、特に『興味ある症例』などより新しい文献をまず探す。国内雑誌の場合は参考文献より英文誌のなるべく新しいものを見つける。後は必要に応じて孫引きを繰り返していき、必要なものを集める。検査値の異常の場合は『広範囲血液・尿化学検査、免疫学的検査』、珍しい症例の場合は『増刊号、興味ある症例』から始めることもある。

文献検索は、以前の『Current Contents』『Index Medicus』などだけに頼っていた頃に比べると、MEDLINEなどのコンピュータ検索により簡便になってきたが、いきなり複数項目で検索してもなかなか思うような文献は現れないことが多い。まず適当な新しい文献を探すことにコンピュータを利用した方が効率的なように思う。ただMEDLINEを利用すれば、一定のテーマでAbstractだけを読むことによって簡単にある程度の知識が得られ、便利であるには違いない。

このようにして集めた文献は必ず項目ごとに細分して整理し、いつでも取り出せるようにファイルに入れておく。こうしてファイルを多く蓄積しておく、再び同じ疾患で知りたいことが生じた場合に有用である。また最初に述べた新しい文献をスムーズに見つけるためには普段より前述の評価の高い雑誌に目を通しこまめに集めておく、それが無理でも重要と思われる論文はどの雑誌に載っていたか覚えておく努力を続けておくと、いざ文献を探す段になっても、容易に探しやすい。もっともこのようなやり方は、コンピュータ

やマルチメディアの発達によりすぐに時代遅れになるかもしれない。

6. おわりに

文献とのつきあい方は、「学んで思わざれば則ちくらし、思うて学ばざれば則ち殆（あや）うし」の一言に尽きると思う。すなわち、文献だけを読んでいたのでは博学にはなれても何も生み出せないし、文献を読まずに臨床経験のみから仮説だけを立てていたのでは独りよがり過ぎない。

これまでの日本の学問は再三指摘されているように欧米諸国より「学ぶ」方に重点が置かれてきたが、米国に変わる指導的立場も期待される現在、「思う」方に重点を置くべきかも知れない。

ここ1-2年の爆発的なインターネットの普及などにより、手に入れようと思えば無限の情報簡単に手に入る時代がやって来た。雑誌の集め方などに苦勞しなくとも、図書をインターネット上に公開している図書館も現れてきた。一見非常に便利になってきたと思えるが、言い換えれば情報過多の時代でもある。

ここではいわゆる医学雑誌のみを取り上げたが、医学雑誌以外に医学情報を手に入れる方法の選択はどんどん広がるであろうし、医学雑誌の概念も数年も経てば随分と変わってくるかもしれない。

この状況は、糖尿病や高血圧で最近注目されている thrifty gene 仮説を連想させる。thrifty gene とは直訳すれば儉約遺伝子で、糖分や食塩を体内に取り込み、なるべく外に出さないように働く遺伝子で、原始時代にはこのような遺伝子が生存に有利に働いたが、急激な都市化により栄養や食塩が豊富に手に入るようになったことにこの遺伝子の淘汰が追いつかず、糖分や食塩を取り込みすぎて糖尿病や高血圧が急激に発症したという仮説である。

同じことが情報量が急激に増大した現状に言えるのではないか。すなわち現在では情報を取り込みすぎるのは必ずしも有利とは言えなくなり、情報を選択することが必要になってきたと思える。雑誌の読み方の文章としては甚だ逆説的な結論になるが、あまり雑誌の内容に必要以上にこだわることなく、独自の仮説を立てる努力を続けることも重要であろう。

表1. 内分泌代謝学分野の雑誌の impact factor (1993年)

1. Endocrine Reviews	12.953
2. Molecular Endocrinology	6.385
3. Front Neuroendocrin	6.045
4. Recent Progress in Hormone Research	5.909
5. Diabetes	5.256
6. J. of Bone and Mineral Research	5.243
7. J. of Cerebral Blood Flow and Metabolism	5.241
8. Diabetologia	5.047
9. Endocrinology	4.256
10. J. of Clinical Endocrinology and Metabolism	4.220